

オリーブの木

No. 48
2013年5月



「母の日」のお遊戯を準備する園児たち。日本の若者も参加(壁で分断されたベタニアの幼稚園で)

この春もまた、日本の若者13名が、イスラエル・パレスチナを訪れ、心から歓迎してくれた現地の人々の優しさ、温かさにつれ、前に進むとする勇気と忍耐を目の当たりにしました。同時に彼らの無力感や焦燥感も感じ取ったことでしょう。現地の子どもたちのはじける笑顔に隠れた不安や恐れをかいま見て、教育支援の大切さを痛感した旅でもありました。

希望もあります。それは、3カ国を結ぶ「友情の絆」。死海への1日エクスカッションで、国の違いや対立を超えて、共に遊び、話し、楽しいひとときを過ごすことができました。分離の壁や検問所に苦しむベツレヘムの青年、また現役のイスラエル兵士たちも友だちとして、そこにいました。このような出会いの体験こそ「平和への道しるべ」であると確信します。

今後ともみなさまには一層のご支援をお願いいたします。

井上 弘子 スタッフ一同



NPO法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX **03-6908-6571**

E-mail : seichi@k.email.ne.jp hiroko@michi-no-kai.com

ホームページ : <http://seichi-no-kodomo.org>

郵便振替 : 00180-4-88173 加入者名 : NPO法人 聖地のこどもを支える会



Accountability
Self-Check 2008

当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウントビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると審査されました。

参加者の感想

3月14日から25日にかけて行われた今年のスタディーツアー。日本の大学生12名、社会人1名が参加して、エルサレム、ベツレヘム、ヘブロン、テルアビブなどを訪れました。

豊かな自然と文化にふれ、紛争地の現実も肌で感じる事ができた今回のツアー。参加者から寄せられた感想の一部を紹介します。

ベタニア老人ホーム訪問を終えて
(このお年寄りたちは、壁の向こうの家族になかなか会えない)



◎当事者性、将来性について、ツアーを終えて

川野 由起

スタディーツアーで見聞きしたこと、考えたことはあまりに多く、まだ整理ができずにいるというのが正直な気持ちです。ここでは、出発前のレポートで述べた当事者性、将来性について、ツアーを終えて考える課題を述べます。

第一に、当事者性について。直接の見聞を通して自らの課題として現地の問題を認識するという意味においては、私の中での当事者性は確実に高まりました。一方で、問題を外から俯瞰できる自分と、問題の渦中におかれている辞書的な意味での「当事者」である人々との決定的な差も強く感じました。私達日本人がチェックを受けず検問を通過する中、アラブ人の仲間が乱暴に鞆の中身をチェックされているのを見た時、彼らは「いつものことだよ」と笑っていました。彼らの日常にいちいちショックを受けている自分に呆然としました。理不尽だと怒り悲しむことができるのは、私が自分の住む外の世界と比較することができるから、いつでもそちらに戻れる立場にあるからこそかもしれないと感じた瞬間でした。

また、とても印象的だったのは、彼らが自分達の問題について話す時、さっと顔色が変わり、非常に厳しい表情をすることです。日本人の若者が、自分

の国や出自について語る時にあのような表情をするのを、私は見たことがありません。自分が守ろうと強く主張しなければ、奪われてしまうだろう何か大切なものを持っている人だけがする表情だったと思います。

今回のツアーでは、そのような狭義の「当事者」だけが持つものに、多々圧倒されました。また私が日本人である限り、それを本当に理解することはできないだろうとも考えました。しかし、問題が根深いほど、「当事者」だけで解決をするのは不可能です。真剣な主張や信念があるからこそぶつかり合う彼らの媒介者となれるのが、当事者性をもった第三者だと思います。ツアーは終わりましたが、これからの私達日本人学生のアクションが大きな課題だと考えます。

第二に、将来性についての課題です。私に取り組む必要があると思うものは主に二つあります。まず、現在被っている実害の相違が、イスラエル・パレスチナ間、またはパレスチナ人の間で非常に多様な形で存在するという事です。最も象徴的だったのは、壁に囲まれてゲットーに住んだユダヤ人を歴史として捕らえる人々と、今現在、青空刑務所とも呼ばれるような壁に囲まれて過ごしている人々が、あの小さな地区に共存していることです。また一口にパレスチナ人といっても、居住地区などにより、受ける制約は様々です。さあ平和を目指そうといった時、さ

まざまな主張があると思います。不利益の排除を声高に叫ぶ人もいれば、入植者との迎合、和解を希望する人、壁がある今が最も平和だと主張する人もいるかもしれません。様々な立場の中、何をもって平和とするのか、どのように意思を統率するのかということに、まず大きな課題があると思いました。

次に、若者たちに自らの行動によって何らかのインパクトを与えられる、という感覚が欠如していることです。あるパレスチナ人大学生が「問題解決のために何ができるか」という質問に「Nothing.」と即答した時の衝撃は、忘れられません。私は彼らから、現状を打破したいという意思よりは、あきらめを強く感じました。彼らが自らの行動の意義を見出さない限り、第三者である私達は何もできないことに気づいたのも、ショックでした。

一方でハンド・イン・ハンド学院では学生が、ここで学ぶことには意義があると誇らしげに語っていました。憎しみ続けたり、希望を持ち続けたりするのは疲れることです。現状に甘んじるのは容易いけれど、自分達の行動にはインパクトがある、と知った人は、現状を変えようという行動をやめないと思います。そのような有効性感覚が欠けている人は、どのような経験を通してそれを育てていくかが課題だと思います。

◎経験をどう生かすか、考えたい

井澤 萌

今回のスタディーツアーで考えたことはあまりにも多く、未だに整理がついていませんが、将来に繋がりそうなものが多かったと思います。

一方で、もっとこうすれば良かったという後悔がないわけではありません。特に、もっとイスラエルに住む人、パレスチナに住む人たちと話すことができたなら良かったと思います。そのような時間も用意されていましたが、自分の英語力が追いつかないこともあり、十分にできたとは思えません。ホームステイ先の人と話したことが一番印象に残っており、そのことを考えると、もっと他の人とも話すことができたなら更に実りの多いツアーになったのかな、と思います。

また、ツアー後半にかけて、みんなが話していた、私達はこの問題に対して何ができるのだろうとい

旅のまとめ

- 3月14日 成田発。パリ経由でエルサレムへ。
- 16日 学校訪問と「分離の壁」の体験。
聖ヨゼフ学院訪問、シルワンの家屋破壊見学(エルサレム)。ウェルカム・レセプション。
- 17日 ハンド・イン・ハンド学院訪問とホロコースト記念館見学。
- 18日 三大宗教の聖地エルサレム見学。ハラム・エツシャリフ(昔の神殿の丘)、聖墳墓教会など。
チェックポイントと「分離の壁」の体験。
悲しみの聖母修道院(老人ホーム)、コンボニアン修道院(幼稚園)訪問。
- 19日 チェックポイントを通過してベツレヘムへ。「分離の壁」建設で苦しむ人々訪問。エマニュエル修道院、デヘイシャ難民キャンプ。ホガール・ニーニョ・ディオス(捨てられた心身障害児の施設)訪問。
ホストファミリーとの出会い。
- 20日 ベツレヘム。エフェタ学院(聴覚障害児童の学校)、ベツレヘム大学(大学生との出会いと対話)、「飢い葉桶」乳児院(クレーシュ、名誉殺人から救われた赤ちゃんが育てられている)訪問。
- 21日 ヘブロン(住民と入植者との争いが絶えない町)。Hebron Rehabilitation Committee(ヘブロン住居回復委員会)訪問。イブラヒム・モスク(ユダヤ教、イスラム教の聖地:アブラハム・イサク・ヤコブの墓)訪問。
- 22日 テルアビブへ。途中、モディン入植地見学。兵士も含めたイスラエルの若者とのミーティング。
- 23日 イスラエル、パレスチナの若者とともに一日エクスカーション。死海と砂漠へ。ベドウィン生活の体験。らくだに乗って砂漠の散歩。テントの中で〈平和〉についての分かち合い。
- 24日 ヤッフアの街散策。
テルアビブ空港から帰国の途へ。
- 25日 成田着。

う話を印象深く思い出します。スタディーツアーであるのですから、ツアー自体で私たちができることはあまりないと思います。学ぶこと、これが一番重要だったのではないかと思います。その上で、これからどうするかを考えなければならないと感じています。

個人的に、パレスチナ問題にはとても興味がありますが、大学の専門分野でパレスチナ問題を扱うのか、将来、この問題に関わっていくのかは分かりません。そのような自分が今回の経験をどう生かしていくのか、何ができるのか、これから考えたいと思います。

出会いと経験に感謝して

石黒 朝香
(当NPO法人理事)

当法人のプロジェクトに参加し、理事も務めた石黒朝香さんが
今秋から、アメリカの大学院に入学することになりました。
8年間の活動を振り返り、今後の抱負を寄せてくれました。



私は2005年に開催された「平和をつくる子ども交流プロジェクト」に高校3年生で参加し、以来8年間、「聖地のこどもを支える会」の活動に関わらせて頂きました。活動を通じて、中東紛争への理解・関心を深めるだけでなく、人と接し、対話することの大切さを教わるなど、現在の私を形作る上で多くの刺激を頂き、感謝しております。本年9月より、米国大学院の紛争解決学修士課程に進学することとなり、一時的に本会から離れますが、大学院では私に出来る平和貢献を模索することで、将来の活動に活かして参りたいと考えています。

なぜイスラエル・パレスチナにこだわるのか、と問われると、格好の良い大義名分はありません。しかし、自分の原点を振り返る際に必ず思い出すのは、2005年に参加した「平和をつくる子ども交流プロジェクト」です。2週間のプロジェクトの間、一緒に参加したイスラエル・パレスチナの高校生たちは、私にとって「同年代の友人」でした。非常にマイペースで異常に主張が強いこと以外は日本人高校生とほとんど変わらず、イスラエル人・パレスチナ人の学生同士も日が経つにつれて仲良くなって、(スタッフに怒られながらも)夜な夜な語り合っていました。

しかし終盤に行われたミーティングで、それまで気づかなかった彼らの核心に触れることになりました。ミーティングは、イスラエル・パレスチナの参加者が紛争によって経験したそれぞれの痛みを語る、というものでした。始まる前は、単純に彼らの生の声が聞けると思っていたのですが、そんな生半可な気持ちで参加できる会ではありませんでした。彼らから語られたのは、家族や友人が紛争の犠牲になったこと、自爆攻撃に怯えた経験など、明るく笑っていた友人達のもうひとつの素顔でした。ミーティングは静寂に包まれ、皆が淡々と語り、またその過去を思い出して涙を流しました。

友人達は、私と生まれた環境が違うというだけで、全く異なる生活を送っていました。大した困難も

なく生きてこられた自分の境遇を、生まれて初めて、認識しました。国

〇〇〇〇

籍を超えて、今日の前にいる友人を支えてあげたい、そんな思いが込み上げてきました。偶然の機会を得て参加したこのプロジェクトで、彼らの存在は私の中でかけがえのないものとなり、この思いが、今でも私の原動力になっています。

「聖地のこどもを支える会」で実施している平和交流プロジェクトは、どれも1つのコンセプトに基づいています。それは、3カ国の学生一人ひとりの顔が見える状況をつくる、ということです。当たり前なことだと思われるかもしれませんが、実際には、現地でこのような状況を設けることは極めて困難です。真剣に他者と向き合おうとすると、否が応でも納得できない意見に直面します。そうした意見を受け入れることは、誰にとっても容易ではありません。プロジェクトに参加する学生はみな、和平に前向きな考え方を持っていますが、そんな彼らでさえ、残念ながら相手の意見を素直に聞き入れられたことは未だありません。しかし私は、この困難に向き合い、いつか乗り越えて受け入れることこそが、平和につながる確かな道であると信じています。平和を望む彼らの為に第三者である日本人が背中を押してあげること、お互い顔の見える関係になる橋渡しとなること、これがプロジェクトの根幹であり、活動継続の意義です。この信念を心に留めて、大学院生活を送りたいと思います。

「教育を自ら選び、享受することができるのは、日本でもひと握りでしかない。それは家族や周囲の人の理解、支援があってこそ得られる。従って、享受した人は、得た技術や知恵を社会に還元する義務がある。」ある人から頂いた言葉です。イスラエル・パレスチナの友人たちとの出会い、「聖地のこどもを支える会」での経験に感謝して、いつの日か役にたてるよう、気を引き締めて留学して参りたいと思います。

国民を束ねられる“何か”

先日、オランダとベルギーに行ってきた。久しぶりに「異国」の地へ足を踏み入れた感想は、「なんて気持ちのよいサービスを受けられるんだ!」という驚きと喜びだった。私のミスにもかかわらず、駅員さんや従業員のほうが“謝りながら”正しい場所や方法に導いてくれる度に、“I’m sorry.”という言葉が久しぶりに聞いたなあと、「新鮮」にすら感じた。

日本に住んでいたときは、例えばホテルに泊まるとか、食事に行くといったことは、お金を払っているのだから“お客様”として扱ってもらうことが「当たり前」だと思っていた。日本で大学を卒業してから勤めた民間企業では、営業をしていた私にとって、お客様は「神様」だった。時には理不尽なことで怒られたとしても、「お客様なのだから」と、冷静かつ丁寧な対応に努めていたように思う。

振り返れば、そういった、いささか“やりすぎ”な日本の“お客様至上主義”も今ではとても懐かしく、我が国の誇りだとさえ思う。それだけ、イスラエルに来てからの、彼らの「ミスを認めない」「謝らない」「雑さ」故の“自分至上主義”に心が疲弊していたのだと、この旅行で改めて気づかされた。空港に着いてから、タクシーの運転手と揉め、道路にはクラクションの音が鳴り響き、家に着くと警備員が口を開けて寝ているという「現実」に、がっかりしたことはいくらでも言える。

さて、そんなオランダ・ベルギーから帰ってきて最初の週末。「戦没者追悼記念日」を知らせるサイレンが、夜8:00、イスラエル全土に鳴り響いた。ベランダから外を覗くと、道行く人は足を止め、車の人も一旦停止し、外に降り、2分間の黙祷を捧げていた。いつもはあんなにめっちゃくちゃでせっかちな国なのに、こういうことに関しては警察など動員せずとも皆きちんと従うから、本当にすごい。いきなり車が停まっても、このときだけはクラクションも罵声も聞こえてこない。全部の車が停止し、きちんと外に降りて黙祷している光景は、圧巻だった。

これに限らず、イスラエルの祝日には「営業をしてはいけない日」や「車に乗ってはいけない日」がある。このときばかりは、皆が「優等生」になり、誰もその「静寂」を乱すことはない。一方、日本で同じことができるかと想像してみると、それを「強いる」ことを可能にするだけの、国民を束ねられる“何か”は日本には見あたらない。でもここには、宗教の力というよりも、“イスラエル人”あるいは“イスラエル”という国に秘められた、ある種「意地」のようなパワーがある気がする。彼らの、その絶対的な「聖域」の部分に触れると、もっとももっとその奥を覗いてみたくなる。きっとこの感覚が、ここでの生活に「愛想を尽かす」ことができない理由なのだと思う。

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- * 毎回 郵便局へ払込みに行く手間が省けます。
- * いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み・お問合せは
当法人事務局 **03-6908-6571**
または **042-636-9218** (中山)

顔の見える支援 里親募集中!

ある特定の子どもの教育を、毎月一定の支援金で継続的にサポートする里親制度。一歩進んだ国際協力のかたちです。

里親と里子の間で、写真や手紙の交換をすれば(任意)、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

詳しくは、当法人事務局まで。

支援者の声をご紹介します



支援をよせてくださる振り替え用紙につづられた、皆さまの声です。ちいさな通信欄に数行のメッセージですが、スタッフ一同、おおいに励まされます。ほんの一部をご紹介します。

少しでもご支援に参加させていただきたいと思えます。スタッフの皆さんは本当に大変だと思います。頑張ってください。ささやかですがお捧げいたします。これからもよろしくお祈りいたします。(東京都 M.Sさま)

いがみ合うニュースが多くて心が痛みます。手を取り合える日が必ず来ることを信じて祈ります。(栃木県 Y.Iさま)

カトリック田園調布教会でプロジェクトの映像を見せて頂き、若い方々の情熱に感激いたしました。今年もどうぞ成功なさるよう貧者の一灯を送らせていただきます。(東京都 S.Hさま)

それぞれの十字架を負った三カ国の若者が、神様の名のもと、被災地ボランティアで交流し、絆を深めることは素晴らしいことです。祈っています。(神奈川県 Y.Oさま)

三カ国の若者が被災地での共同作業を通して、良い交流、相互理解ができますように。(広島県 A.Oさま)

「障害者」というレッテルを頂いて動くことに大丈夫かな?? と先ず考える今の私が歯がゆいです。大きな目的の達成の上に祝福あれ!と祈ります。(静岡市 I.Mさま)

将来、必ず平和が訪れることを確信し、祈りながら今やれることを積み重ねていってやることを応援します。(神奈川県 Y.Oさま)

厳しい現地の状況を案じています。子どもたち、家族の人々に平安を!(東京都 A.Oさま)

未来に向かって子どもたちが教育によって賢く成長していきますように、お祈り申し上げます。(神奈川県 N.Yさま)

被災地へのボランティアを頑張ってください。私も(2012年)5月に少しでもボランティアをしてきました。被災地への方に、又援助している方々のため祈らせていただきます。(香川県 Y.Aさま)

86歳の老女のせめてもの援助です。無力ながら皆さまのお働きに感謝して、ほんの少々をお送り申し上げます。(熊本県 K.Aさま)

よくぞ大槌に来てくださいました! 心から感謝いたします。感動いたしました。(岩手県 I.Sさま)

国境を越えての若者たちの勇気と活力に唯々感謝です。東北の被災地の人々に明るさと生きる強さを与えてあげてください。ボランティア、本当にご苦労様です。ささやかな支援ですが、何かの足しになるでしょうか。(東京都 T.Kさま)

イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ

『平和の架け橋in東北2013』プロジェクト支援イベント

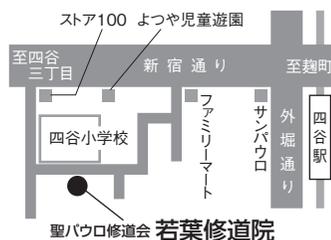
7/6(土) 開場16:40 17:00 チケット ¥5,000
聖パウロ修道会 若葉修道院 地下ホール 80名限定

上原令子 ゴスペルコンサート

中東和平へのメッセージを音楽に乗せて。気鋭のゴスペルシンガー、上原令子さんのミニコンサート。曲目は「黄金のエルサレム」「わが民イスラエル」「ほんの少しのやさしさ」他。

パレスチナ料理 ビュッフェタイム

東京・神田の高級パレスチナ料理店『アルミーナ』による立食ディナータイム。異国情緒たっぷり、当夜限定のスペシャルメニューをお楽しみください。



チケットは当法人事務局まで。
参加人数80名限定です。
お申し込みはお早め。

パレスチナからの声

ステラ・ペドラツィーニ

イブラヒム・ファルタス神父の秘書として働くステラから寄せられた、子どもたちのエピソードです。(彼女は、ここ数年プロジェクトやスタディー・ツアーの現地スタッフとして協力してくれています。)

聖地、この地ではさまざまなものが対比を見せる一方、分けがたく混じり合った色彩、香りを醸し出している。しかし、それらは感覚、感性のものであり、現実には溶け込むものも、歩み寄るものもない。日常では限界、境界、禁止、憎しみと無知の壁がそびえ立っている。

だが、よく見れば、明るい側面も確かにあるのだ。私は日々、町の子どもたちの瞳、仕草にそれらを垣間見ている。ある出来事では、子どもたちの湧き上がる歓喜の表情を見た。

5月のある日、みんなで海へ行った。生まれて初めての海に大きな子から一人ずつ入っていく。塩辛い海、寄せては返す大きな波……怖くて得体の知れない海にも、子供たちはみるみる慣れ、砂に親しみ、海辺に溶け込んでいった。

この特別なできごとは、中東のための「ヨハネ・パウロ二世財団」で働く私の同僚たちによる、子どもたちのための企画だった。みな、ベツレヘムの町の子たちだ。



初めての海で大はしゃぎをするベツレヘムの子どもたち

2000年、町は灰色の分離の壁に取り囲まれた。以来、向こう側の親類を訪ねることも、仕事を探すことも、自分のやり方で自由に暮らすことも困難になった。左の写真のような壁に閉ざされ、向こう側の職場に行くにも検問所を通る。通行許可証が必携なのだ。しかし、この許可証なるものは容易には発行されず、運良く手に入っても最長6カ月の期限付きだ。

こんな状況下、2004年以降に生まれた子供たちは町を出たこともなく、まして海など見たこともなかったのだ。だから子どもたちが水を跳ね上げ、砂浜を駆け回りながら挙げる歓声は、山をも揺るがすかと思われた。

自由な暮らしが当然の人々、夏の休暇は海辺で過ごすのが恒例の家族にとっては、取り立てて語ることもないかもしれない。しかし紛争地で生を受けた子供たちの歓喜の体験を、支援者の皆様の心に留めて頂ければ幸いである。



ベツレヘムを取り囲む分離壁



エフェタ(聴覚障害児の学校)でお絵かきの時間

スタディーツアーで



急速に拡大するイスラエルの町モディン(パレスチナ領土との境にある)



〈死海1日エクスカーション〉海拔0地点で、友だちになったイスラエル・パレスチナの若者たちと

街で出会った子どもたち



元気いっぱい! デヘイシャ難民キャンプの男の子たち



飼い葉桶乳児院(クレーシュ)訪問



イブラヒム神父、ステラ、パレスチナの友だちとフランシスコ会聖地特別管区にて(エルサレム)



課外授業中の女の子たち(ヘブロン)